「津軽の雪」他、雪の話題

JJ1SXA/池

太宰治の小説「津軽」の冒頭に「津軽の雪」として次の7種類の雪を掲げています、「こな雪（粉雪）」「つぶ雪（粒雪）」「わた雪（綿雪）」「みず雪（水雪）」「かた雪（固雪）」「ざらめ雪（粗目雪）」「こおり雪（氷雪）…小説の原文では、こおり雪は、こほり雪となっている、いわゆる旧仮名遣い」です。

「雪には降雪と積雪の2種類があり、取り上げている7つのうち3つは積雪の状態を表すことばで、津軽に7つの雪が降るというわけではないのだそうです。

然し、新沼謙冶が唄う「津軽恋女」（作詞:久仁京介、作曲:大倉百人）では、「津軽には七つの　雪が降るとか　こな雪　つぶ雪　わた雪　ざらめ雪　みず雪　かた雪　春待つ氷雪」となっています、まあ、こちらは、歌謡曲ですから、細かいことは抜きにしましょう。

日本雪氷学会では、雪質によって積雪を次の9種類に分類している。

新雪～降雪時の結晶の形がほぼ完全に残っているもの。

こしまり雪（小締まり雪）～樹枝形などの結晶が若干残る程度で、ほとんど丸みを帯びた氷の粒。

しまり雪（締まり雪）～圧縮や焼結により丸みを帯びた氷の粒。粒子同士が網目状の組織で緩やかにつながっている。

ざらめ雪（粗目雪）～水の作用により粗大化した氷の粒。内部・表面に水を含むものと再凍結したものがある。

こしもざらめ雪（小霜粗目雪）～新雪が融解・霜の付着などによって、平らな形状となった小さな氷の粒。

しもざらめ雪（霜粗目雪）～ 新雪を核として成長した霜が肥大化し、骸晶状の氷の粒と化したもの。

氷板～板状・層状の氷。

表面霜～積雪層の表面に発達する霜。

クラスト～積雪層表面にできる再凍結によってできた固い層。

江戸時代の、 天保8年（1837年）に出版され、当時のベストセラーとなった、「北越雪譜」、著者は現在の新潟県南魚沼市塩沢で縮仲買商・質屋を営んだ鈴木牧之だ。

雪の結晶のスケッチ（「雪華図説」からの引用）から雪国の風俗・暮らし・方言・産業・奇譚まで雪国の諸相が、豊富な挿絵も交えて多角的かつ詳細に記されており、雪国百科事典ともいうべき資料的価値を持つと言われる。

矢張り、越後、新潟県は雪国だ、この「北越雪譜」は、細かい内容は知らなかったが、雪の結晶の図鑑として説明を受けていた、確か、まだ小学生だったのでは無かろうか。

最近は、佐渡ヶ島の雪は少なくなっているようですが、私の幼年期の時代は、結構雪が多く、道路の除雪も現在のようにはいかず、唯一の交通機関のバスが動かないということは良くありました、東京に居れば、何年かに1～2回の大雪に悩まされますが、雪国は、冬の時期はずっと雪に明け暮れる毎日で、佐渡ヶ島にも7つの雪が降ったのか。